

もう10年以上前のこと。わが家にいた、中学校に入学したばかりの里子の女の子が学校からいなくなつた、と連絡が来た。

妻は急いで学校に行き、運動場のトイレに隠れていた彼女を見つけた。なぜそのようなことをしたのか妻が尋ねると、自分の境遇をクラスメートからあれこれ聞かれるのが嫌だったという。また、自分だけが親と暮らせないことが悔しい、と泣きながら「里子の気持ちなんか、分からないよね！」と言ったそうだ。

わが家に来てまだ半年ぐらいの出来事だった。その後、高校に入學する頃には学校生活も楽しく過ごし、高校を卒業して自立していた。里子もさまざまな葛藤を抱えながら、里子であることを受け入れなければならぬ。里親だけでなく里子も頑張っているのだ。現在の日本で、里子という立場は一般的ではない。妻は高校時代を米国で過ご

したが、周りに里子が当たり前のようにいたらしい。ハリウッドスターが、アフリカ系やアジア系の子どもを養子にしている姿もテレビで見たことがある。これに比べ日本は、里親や里子であることが珍しく、それを公にしたくないという考

普通にあるという感覚を、社会や里親、里子に持つてほしい。そのためには、欧米のように里親家庭が増える必要があるのだろう。国も子どもの里親への委託を進めてはいるが、少ない。まだ多くは施設に入所している。理由はいつか

# 知ってほしい！里親制度

はなびやま のりお  
**畠山 憲夫**



えも少なくない。近年は社会的少数者の人々が自らの立場をはっきりと表し、その権利を主張している。そのような時代に、実の親子でないことを、隠しておかなければならないような社会であつてほしくない。里親家庭のように、血のつながりのない家族も

あるが、今、求められているのは、安心して子どもを預けられる里親だ。里親制度があまり理解されてない日本では、養子縁組制度と同じと考えている人も多い。里親制度の中にも「養子縁組里親」はあるが、里親制度は子どもが欲しい親のための制度では

なく、「家庭で暮らせない子どものための制度」なのだ。それをしっかりと理解した上で、里親になつてくれる人が増えることを願う。

一昨年、栃木県は里親の一つである「養育里親」の愛称を一般公募し、養育里を意味する。とちのきフォスターはある一定期間、子どもを養育する里親で、その子どもの親権を持たない。あくまでも実親の代わりの親として、子どもを育てる。ただし、期間が過ぎても築き上げた親子関係が続いていたり、場合によってはその里子が養子になつたりすることもある。

親は「とちのきフォスター」と呼ばれることになった。フォスターとは英語で里親。とちぎ家庭養育推進協議会代表理事。フリーの映像ディレクターとして28年間、テレビ番組を制作。2005年に日光市での児童虐待防止のNPO法人立ち上げに参加し、里親となる。10年にファミリーホーム「虹の家」を設立。21年より現職。県里親連合会会長。東京都出身。同市在住。68歳。

里親制度の包括的な支援を行う「栃木フォスターリングセンター」は現在、県内各地で里親の制度説明会を開いている。そこで、施設や里親の元で育つ「社会的養護」の現状や里親の体験発表、里親になる方法や支給される手当、養育費の話も聞くことができる。ぜひ、一人でも多くの人に参加してもらいたい。